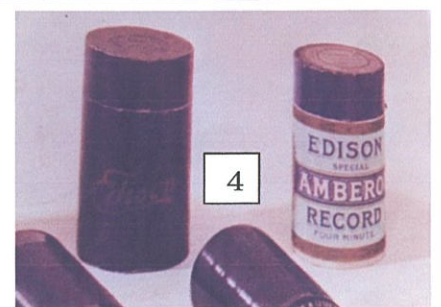
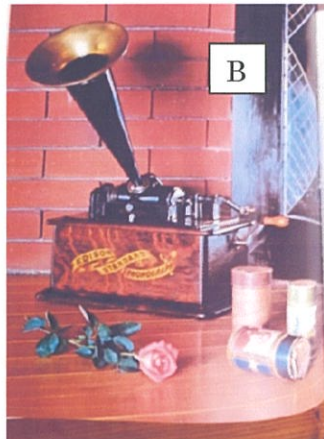


セルロイドと蓄音機



PHONOGRAPH 蓄音機・第 1 号が、1877（明治 10）年に、アメリカの、トーマス・アルバ・エジソンによって発明されました。エジソン 30 歳の時でした。

写真の A は、その当時の広告です。エジソンが左手にしているのが円筒型蠟管レコードです。蠟でつくった管、蠟管の中に人の声や楽器の音が記憶されて、その音がラッパから流れるでる仕掛けです。録音は 2 分間でしたが、当時では大変な出来事でした。

エジソンの円筒型蠟管とは、右写真 1, 2, 3, 4, のようなものです。

- 1、ロイヤルルパープル・シリーズ 紫色を基調とした、特別製品の蠟管です。
- 2、大口径蠟管 1899（明治 32）年発売。アメリカのコロコロンビア社発売の蠟管に対抗して、エジソンが開発した口径 5 センチ、長さ 4 インチ、2 分間のコンサート録音機用です。
- 3、標準蠟管 口径 2.25 インチ長さ 4 インチ、白色、黄色、褐色、黒色などの種類があり 2 分間演奏用です。
- 4、アンベロール蠟管とブルー・アンベロール アンベロールの標準蠟管は、

3と同じ寸法で、外側をブルー・セルロイド又はプラスチック管で内部を石膏固めたもの。

ここで、セルロイドが、蓄音機に始めて使われました。

エジソン蓄音機では、ホーンが露出していました。が、アンベロールからの蓄音機にはホーンが内蔵されました。1909（明治44）年に販売。





上の写真は、セルドハウス横浜館 2F に展示中の蓄音機です。ビクター社のマークがついています。

このターンテーブルの蓄音機は、1903（明治36）製品です。トーンアームとサンドボックスが分離されました。この頃のエジソン蓄音機はまだ蝸管でした。エジソン機が蝸管から平円盤に代わるのは10年先でした。エジソンは10年もの間、蓄音機の仕事から離れていたからでしょうか。

この平円盤の蓄音機は、星雲社発行の「図説世界の蓄音機」の73ページによりますと、ビクター・V-1号のようです。この本に次のように書いてあります。

ビクター・V-1号

VICTOR Model 1

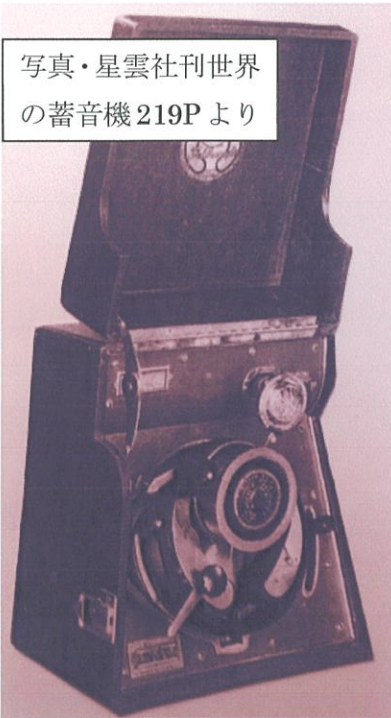
(1903年)

(WDH:280×280×125mm)

この年からビクター社は“ビクター・ザ・ファースト（1号機）から”ビクター・ザ・シックス（6号機）までの6機種を発表した。そのため本書では、各機種の表示を号としてある。この1号機はニッケルメッキのグーネック・トーンアーム、エキシビジョン・サンドボックス。8インチの皿の様な下面をもったターンテーブル、一本ゼンマイであ

る。ホーンホルダーは黒ペイントに金色の線で唐草模様が描かれている。当初は8インチだったターンテーブルは1910年には10インチに変更され、モータースプリングも強化された、ホーンは黒のボディに金メッキのベル型で長さ250mm、口径242mm。

写真・星雲社刊世界の蓄音機219Pより



1937(昭和12)年、セルロイドを使用した国産の蓄音機が現れました。フィルモンというセルロイドフィルムがレコード(平面盤)の役目をした蓄音機です。

小西昭三が、昭和5年頃から研究を始め昭和12年に完成。卓上型とグランド型の2機種があって長唄、講談、浪曲など邦楽ものを主体に35分もの連続演奏ができました。だが第二次世界大戦のため事業中止。



←サウンドボックスは、市販品。針が下の丸いフィルムを拾う。

←幅35ミリの長さ13センチの丸いセルロイドフィルムをエンドレスに繋いで、円盤の代わり。

サウンドボックスの針が、下の丸いフィルムの音溝から音を拾い上げる方式の蓄音機です。セルロイドフィルムの製造が大変な作業だったようです。工場は狛江にあり、社名は日本フィルモン株式会社でした。

フィルモン機用のセルロイドフィルムを横浜館にて展示中です。この展示が始まってから1年近くの間、フィルムが発する激しい硝酸の臭いに閉口いたしました。



2016(平成27)年3月31日「了」